プロジェクト報告

「人新世における持続可能な世界のあり方をペルー・アンデスの人々から学ぶ」プロジェクト報告

鳥　塚　あ　ゆ　ち

本稿は、2024年度国際研究センター文部科学省補助金により実施された「人新世における持続可能な世界のあり方をペルー・アンデスの人々から学ぶ」プロジェクトに関する研究の報告である。

本プロジェクトは、前年度プロジェクト「ペルーにおけるグローバル化となりわいの接合点」の継続課題として実施された。2023年度はグローバル化によるペルー社会の変容について、人々のなりわいと流通に焦点を当てて議論を行った。プロジェクト代表者の鳥塚はアンデス高地に暮らす牧民とアルパカ毛の国際市場の関わりについて、メンバーの岡本年正は一般的に「大地の神」と称されるパチャママ（Pachamama）の表象・流布・存在について、大貫良史はアシエンダ（hacienda：大農園）に付与された負のイメージと労働の実際について研究を進めた。議論を重ねるなかで共通の問題意識として顕在化したのは、とくに先住民社会においては、そのなりわいを市場中心主義的に説明するのは困難であるということと、なりわいの背景にある自然との関わりを議論に含めるべきであるという意見であった。また、後者の議論においては人間と自然を二項対立的に捉える限界も指摘された。

2024年度はこれらの議論を発展させ、グローバル化の周縁で生きるペルー・アンデスの人々をおもな対象として、外部社会の論理とは異なる世界のあり方を人々の言説や行為から探究することで、人新世における持続可能な世界とはどのようなものか、また当該社会に変化が及ぶ際に人々がどのように対応するのかを検討することとした。

活動内容としては、研究会を2024年７月27日、11月17日、2025年１月31日、３月26日と４回開催し、各自が以下の内容で研究報告を行った。

鳥塚は、ペルー南部高地でリャマ・アルパカを飼養する先住民を対象に現地調査を実施し、家畜の持続的利用のあり方と在来知の関係について、とくに品質改良への評価と有色個体の回復状況に焦点を当てながら人間・動物・自然との共生関係について論じた。

岡本はアンデスの地方都市における民間信仰の神格であるパチャママについて、その歴史的変遷や異なるアクターによる捉え方の違い、パチャママと人々のあいだの互酬関係の分析を通して、伝統や慣習と市場原理が混淆した世界について考察した。大貫は伝統的なアンデス共同体における経済を取り上げ、自然を「資源」としてのみ扱う限界を示し、自然や場所に対する精神的・象徴的な見方も含めることで現代経済学に欠ける分析視点が補えると主張した。2024年度からメンバーに加わった佐々木直美は、先住民が継承してきたケチュア語による歌と儀礼に着目し、なかでも「タキ・オンコイ」と呼ばれる事象の名称と意味を再考することでその実像に迫り、またそれに関連すると考えられる歌の分析から人々と自然との関係を考察した。

これらの研究成果は学会等で報告済みである。各々の具体的な研究内容については、プロジェクト報告および論説としてジャーナルに収載する。

鳥塚・岡本・佐々木が専門とする文化人類学においては、今世紀に入り、現代社会が抱える気候変動や食糧問題など地球規模の課題を解決するための考え方として、人間と自然あるいは非人間がともに暮らす世界の捉え直しが検討されてきている。これは「存在論的転回」と称されるが、アンデスの人々の世界の捉え方や生き方を議論することはこの学術的潮流に対しても十分に有用であると、メンバーそれぞれの研究報告を通じて確認された。この研究内容については、文化人類学の射程を超えて、大貫の専門分野である経済史においても応用が可能である。アンデス地域からどのような問題提示ができるかをさらに議論するため、翌年度も研究を継続し、人の生のあり方を、とくにその活動と自然との関わりや互酬性の観点から追究することとした。

末筆になりましたが、本プロジェクト実施にあたりご協力いただきました国際政治経済学部と国際研究センターの皆さまに感謝申し上げます。